

## 明日に向かうために

菅原 智奈美

大学の正面玄関を出て、校門に続く道を通って家に帰る。普段から急ぎ足の私が、最近では大きな白樺並木が教えてくれる季節の移り変わりを噛み締めながら、ゆっくりと歩いている。去年もこの季節を見た。でも今年は、目に見えるもの全てが違う。

十九歳。もう、十九歳。

なぜだか、切なくなった。横断歩道の信号が点滅しているのに、足下の一步が重い。だんだん目の前の景色が霞んでくる。頬を拭ったカーディガンの色が変わった。今、目に見えない何かが、ここを動かたくない私の背中を必死で押そうとする。

「さゆきがさゆきのままでいられるように、いつだって自分だけのリズムをとるんだ」。別れ際、真ちゃんはさゆきにそうアドバイスした。この言葉が、今も私の心に真っ直ぐに響いてくる。

中学一年生のさゆきは、素直で純粋な女の子だ。近所に住むいとこの真ちゃんと仲良しで、幼い頃からよく一緒に遊んでいた。そんな真ちゃんが、東京でバントをやりたいという夢を叶えるために上京しようと決意する。いつだって夢に向かって一生懸命な真ちゃん。大切な真ちゃんの夢が、手の届くところまでやってきた。さゆきはそれがとても嬉しかったのだろう。さゆきにはまだ夢がなかった。だからこそ、そんな真ちゃんの姿にさゆきはたくさん影響を受けたに違いない。さゆきの家族はみんな、真ちゃんを良く思っただけでいい。でも、高校に行かなさうが、金髪頭だろうが、今も昔も変わらぬ真ちゃん。そんな真ちゃんを、さゆきは大好きだった。

「リズム」。真ちゃんの言葉の中にも含まれていて、この本のタイトルにもなっているこの言葉に、私は過剰に反応していた。中学校と高校時代、吹奏楽部に所属していた私には、リズムがどんな曲においても大切だということはよく分かる。リズムが崩れてしまえば、メロディーもそれを支える他の旋律も、全てが噛み合わなくなってしまうからだ。バンドをやっている真ちゃんは、生きていく上でもそれは同じだということを知っていた。周りなんか気にせずに堂々と自分の道を進んでいく真ちゃん。さゆきはそんな真ちゃんの背中を、少しだけ複雑な気持ちで見ていたのかもしれない。真ちゃんを選択を応援したいという気持ちとは反対側にある、ちょっぴり胸がくすぐられる思い。ずっと一緒だった大切な人が、自分より先に大人になっていく。それは嬉しくもあり、切なくもある。

大人になるにつれて生まれてきた、様々な変化。私もさゆきと同じようにそれを感じている。自分を取り巻く環境も、関わる人も変わっていった。それと同時に、あれこれ考えずにまず

は何事にも挑戦してみようとする勢いがなくなった。周りからの評価を生きがいにする自分がいなくなった。自分自身の変化は、私が一番よく分かっている。でも、中には受け入れたくない自分もいる。良い意味でも悪い意味でも、私は大人になった。

さゆきも、幼い頃には想像もしなかった現実を目の前にしていくにつれて、戸惑っていったに違いない。さゆきの周りに起こったことは、真ちゃんの上京だけではない。真ちゃんの両親の離婚もその一つだった。自分の周りにあった幸せな光景が、また一つ崩れていく。私だったらどうするだろう。泣き喚くだろうか。それとも、黙ってその場に佇んでいるだけだろうか。受け入れたくないこと、でも受け入れるしかないこと。その両方を抱えて生きていくということは、まだ中学生のさゆきにとって難しいことだったはずだ。でも、それを諦めずにさゆきは歩き続ける。その強さは一体どこから来るのだろうか。それが知りたくて、私はページをめくり続ける。

私の中に新しい風が吹き込んできた。さゆきは、私が思っていた以上に成長していたようだ。いつだって自分をごまかして、自分と向き合うことをしなかった幼い頃の私とは違う。さゆきはいつでも前向きだった。果てしない未来を想像しながら、からっぽの明日にたくさんものを詰め込んでいく。そんな風に生きていこうとする力がさゆきにはあった。どんな現実にも負けないたくましさ。そんな強さも、真ちゃんからもらったのだろうか。もしかしたらさゆきは、不安に思いながらも、自分が大人になっていくのを心のどこかで楽しみにしていたのかも知れない。それが強さの秘密なのではないだろうか。

裏表紙に辿りついた。深呼吸をして本を裏返し、机の上にそっと置く。そして目を閉じて考えてみた。そこで初めて分かったこと。

大人になることを恐れないさゆき。そして、大人になっていくことに抵抗を覚えている自分。私はいつだって、変わっていくことを恐れている。私は私のままでいたい。でも、そんな保障はどこにあるのだろうか。私がずっと変わらずにいられるという約束は、誰と交わせばいいのだろうか。そんなことを毎日のように考えている。今日もまた、この本を手にとった。リズムが崩れてきた。そんな風を感じたら、もう一度真ちゃんの言葉を思い出す。なんだか、力が湧いてくる。また進んでいけそうな気がする。

向こうに、階段を二段越して駆け上がっていかうとする自分が見える。あと一年もすれば、私は二十歳になるのだ。この本に出会って漲った力を使って、私は大きく飛躍するための元氣

をもらった。待て待て、もう少し落ち着け。無意味に焦っている自分の洋服の袖をつかんでそんな言葉をかけたくなる。

やはりたまに私は、まだ見えない自分の未来に目を瞑りたくなることがある。私たちは、大人になっていく。これから生きていく長い人生の中で、どれだけのものが、人が変わっていくのだろう。ここに来るまでに、時に大切なものを抱きしめて、時にそれを手離して、いつも何かを選択して生きていかなければならないことを知った。心が痛む思いもたくさんするだろうし、数え切れないほど涙も流すだろう。未来を想像すればいつだって明るい。自分のプランがあるからだ。でもそれと同時に、その実現のためにどれほどのものを失っていくのだろうかとも不安になる。私は、臆病だ。

このままがいい、ずっとこのままがいいと願うことがある。涙がとめどなく溢れてきて、胸が苦しい。現実を受け止められない自分、受け止めたくない自分。様々な自分が交差して、負の感情からなかなか抜け出せない。それでも私たちは歩いていかなければならない。私は、大人になっていくこと、変わっていくことは、悲しいことではなく、いつも嬉しいことであってほしいと思う。だからこそ、切なさ負けずに頑張ろうと思えるような気がする。

変わっていくことは、何も怖いことなんかじゃない。この本を手にとると、いつもそんなことを言われているような気がする。今抱えているこの気持ちを大切に、純粋な気持ちで生きていくこと。私はさゆきからそんなことを学んだ。

そしてもう一人、私の心を動かした登場人物がいる。それは、さゆきと真ちゃんの幼なじみのテツだ。テツはさゆきから見てもとても弱い。泣き虫でいじめられっ子。でもテツは、さゆきのことをいつも見守っていた。上京する真ちゃんに隠れて涙していたさゆきの隣に居続けた。「僕、強くなるよ」。そう言って、さゆきよりも先に真ちゃんの夢への一歩を後押しした。それからというもの、テツはなんだか強くなったような気がする。人は、きっかけがあれば強くなれるものなのだろうか。腹をくくれば、何でも受け入れることができるのだろうか。そんなに簡単なことではない。でもそういう変わり方もあるのだと思った。変わるきっかけは、テツが自分で作り出したのかもしれない。泣き虫で優しいテツだからこそ、内に秘めたものが強かった。さゆきと同じようにテツもまた、大人になっていった。

いつからかこの物語には続きがある。私はまだ読んでいない。私は、さゆきのこれからを想像してみた。でも、なんとなく予想はできる。壁に突き当たった時には一生懸命考え、そして何かを選んで、そうやって大人になっていくのだろう。自分らしく、彼女にしか叩けないリズムを奏でながら生きていくのだら

う。さゆきなら、素敵な未来を描ける。私はそう信じている。

大学生になった私は今、たくさんの人に出会い、たくさんを経験をしている。十九歳という、色々な意味で人生の出発点に立った。伏せていた顔を上げてみると、真っ直ぐな一本の道が私の前に走っている。今やっと体中に背負っていた荷物を下ろした。そして、重い足を一歩ずつ、自分の意思で運ぼうとしている。この自分の中の変化は、これからも私の背中を押してくれるだろう。中学生の女の子との、大切な出会いがあったから。

私は将来、教師という道を選びたいと思っている。今まで私が経験してきたたくさんのお出会い。いつ、誰との出会いが、どんなものとの出会いが人生を変えていくか分からない。生きている一瞬一瞬がかけがえのない宝物で、とても尊い。今、心からそう思えるようになった。そんな自分の思いを自分自身の将来に託してみたい。

それと同時に、国際協力の現場にも足を踏み入れていきたいと思う。世界中のどんな子どもたちにも、みんな平等に未来がある。国や人種、言葉や文化に関係なく、いつでも誰かの立場に立って寄り添ってほしい。そして、一緒に考えながら生きていきたい。

いつでも真っ直ぐに自分を見つめていたいと思うようになった。心に嘘をつくことなく、自分を偽ることなく。私が見たことのない世界が、まだまだたくさんある。そんな世界を、自分の足で見に行きたい。たくさん遠回りしてやっと見つけた大切な夢。

今描く自分の未来を確実に実現させたい。自分のプラン通りの未来を、私はまだどこかで望んでいるのかもしれない。でも、完璧は欲しくない。その時の自分の選択をいつだって誇りに思えるように、自分で選んだ道は自分で正しくしていきたいと思う。迷ったら「やっpegらん」と、いつも自分の背中を押してあげたい。そして、どんな時も自分を信じてあげたい。

自分だけのリズムを叩きながら、十九歳というこの時を一生懸命生きていく。私はそうやって大人になっていこうと思う。

「先生！」ぎゅっと背中に抱きつかれ、笑顔で振り返る。そんな、幸せな夢を見た。

『リズム』 森絵都著、講談社、1991

(すがわら ちなみ・函館校1年)